



隆志先生と何を話しているのでしょうか？

《症例検討・117》

## 嫁がおかねを盗む

院長 清水 允熙

今回は、七十八歳の女性Kさんの例です。症状は以下の通りです。

### 症状

Kさんは、家族と一緒に2年前の夏の暑い日に病院に来ました。ニコニコしていて、とても礼儀正しい方でした。相談に来た家族は長男と長女の各夫婦でした。話によるとKさんの症状と経過は、主として次のようでした。

1〜2年前頃から忘れっぽくなってきた。時々「誰かが家の中を覗いている」と家族に訴えていたが、特にそれ以上のことはなかった。また、家を覗いている人もいなかった。

最近では「嫁がおかねを盗った」と、自分の娘たちの家を訪問しては言い触らし、警察へ電話をして大騒ぎになったことも2度ある。

## 生活歴

朝食のときなど、食卓についたKさんが「今日もおかねを盗られないようにしなければね。油断も隙もない家ですからね」と、嫁のいるところで息子たちと言ったりする。それを聞いている孫たちも、おばあちゃんであるKさんを避けるようになった。

もちろん、おかねなど盗ったこともない長男の嫁は我慢の限界にきてしまっている。



Kさんは、銀行員の長男（49歳）夫婦と一緒に生活しています。孫は2人（22歳の大学生と18歳の高校生）と、合計5人での生活です。夫（元公務員）が亡くなってからは7年経っています。子供は娘2人と息子2人の4人で、女・男・女・男の順です。

Kさんの夫は7年ほど前に75歳で亡くなりました。肝臓の病気があったそうです。

「酒もタバコもやらない真面目でおとなしい人だったのに」と、Kさんは残念そうに繰り返しました。酒のみ、タバコも吸い、そしていいかげんな生活をしていても長生きをしている人が身近にいるからでしょう。

夫が亡くなり、ひとりでの生

活の時期もごく短く、Kさんは長男の家族と一緒に生活するようになりました。そうすることでもあったので、何の不満もなかったようでした。

◎

ところで、Kさんは夫が亡くなった後も残された現金の遺産が預金通帳に2千万円位ありました。この預金通帳を夫のように思い、生きる支えとしていました。

「夫が残してくれたおかねがあるから…」

「お父さんが残してくれたおかねがあるから…」

がにこやかでいられる魔法の言葉でした。

しかし、あるとき長男が孫のために、ある程度まとまったお

かねを必要としたことがありま

した。一緒に生活して世話になっていたことなので、何のためらいもなくKさんは自分のおかねを出しました。その後、このことが他の子供たちの知るところとなりました。他の子供たちもそれぞれ家族があつて、何かとおかねが必要だったのでしよう。皆「自分たちにもおかねを貸してほしい」とKさんに頼みました。Kさんは子供たちには公平でしたので、預金は大幅に減少しました。

その後、子供たちは母親へのおかねの返済についてはあまり意に介さなかったようです。そればかりでなく、あてにしきつたように2度、3度とさらに追加しておかねを借り出し、預金額は減るばかりとなりました。

◎

問題はこの頃から始まったよ

うでした。Kさんの将来への自信は非常に不確かなものになってしまったのです。預金通帳の中で、夫の優しさが見るも無残な姿になり、悲しみながら消えていくようにKさんには思えました。Kさんの元氣のない毎日が始まりました。「もうこれ以上は貸してあげられない。もう駄目よ。申し訳ないけど、もう駄目。これ以上貸すと私が病気になったとき、子供たちに迷惑をかけてしまうし……。もう誰にも…駄目よ…」と幾度も心の中で繰り返ししました。

自分ができたからです。それは、誰かが覗いていて、Kさんのおかねを盗っていつてしまったことです。Kさんにはそう思えたのです。彼女にとって無意識にそう考える以外に救われる道がなかったからなのでしょう。「おかねを盗られたのよ」子供たちと顔を合わすたびにKさんは言いました。だから貸してあげられないという意味でした。

もうひとつ、Kさんも気がつかない意味がありました。子供たちに「できたら、おかねを返してほしい」という意味です。しかし、子供たちは誰がおかねを盗ったのかを詮索するだけでした。犯人など、もともといるはずはないのです。なぜならば、犯人はおかねを借り出し、それを返済しない子供たちだからです。Kさんの安心と優しい夫の思い出を壊している子供たちこそが犯人だからです。

◎

Kさんは子供たちにとってはよい母親でした。皆で犯人を探し出そうとしたとき、彼女は自分の子供たちを守りました。それも無意識にです。その結果の犠牲者は長男の嫁でした。「嫁が盗った。嫁が泥棒です」とおかねのない原因を言って歩きました。Kさんはそうとしか思えなかったからです。姑にそのようなことを言われては、長男の嫁はとんでもない災難に見舞われたこととなります。夫の弟妹たちに「それは違うよ、かあさん」などと今さら言ってもらっても、嫁にとっては心の安らぎの足しにはなりません。孫たちも自分の母親を泥棒呼ばわりされては心穏やかではありません。長男の家族にKさんと別居するかどうかの話し合いが始まりました。成り行きとしては当然かもしれません。



## メモ

私たちはKさんの認知症進行の原因を次のように判断しました。

○夫が亡くなってからの孤独。  
○子供たちは忙しくて、Kさんをあまり相手にしていない。Kさんにとって子供たちは優しい存在となっていないこと。(その分、長男の嫁が運の悪い立場にいること)

○長男の子供たちはもう大きくなっていて、おばあちゃんであるKさんを相手にしていないこと。小さい時からの同居ではないので、お孫さんたちもお年寄りはどう接してよいのかわからなかったこと。  
○子供たちが、Kさんのおかねを借り出したこと。預金額を減少させ、そのままにしているこ

と。つまり返済することの意味を認識していなかったこと。そのためKさんの不安感を増大させ、唯一の安心と慰めを失わせたこと。

○「おかねを盗られた」「嫁がおかねを盗った」というKさんの訴えの意味が「もつと優しく付き合っておくれ。私の言うことも聞いておくれ」ということであることを子供たちは理解できなかつたこと。

○無理解で配慮に欠けた子供たちでさえも、悪者にしない母親の考え方と、その犠牲者となっている嫁の立場を子供たちは理解できていないことなど…。

これらのことを子供たちに報告しました。子供たちは母親を大切にしている人たちでした。私たちの方針に協力してくれま

した。Kさんは元気になり退院しました。

◎

嫁が姑に悪く言われるときは、長男や弟妹たちが母親に対しての配慮に欠けていることが多いのです。

特に長男が母親に対しての配慮に欠けている場合、嫁に自分にとって大切な長男を奪われたと思いついてしまった場合も同様な事例が発生します。



ニリンソウ  
花言葉『協力』

## 富士山麓病院介護医療院の「ホームページ」ご案内

当施設は認知症高齢者の症状を「改善」「進行を遅らせる」「進行の停止」そしてご家族の精神的負担を軽減することを目標とし日々努めております。施設のHPでは認知症に対する各種対応法やケアについて記載してあります。ぜひ一度ご覧になってみてください。



<http://ninchisyo.jp>

## 初めての介護医療院

栄養課 水城 都

富士山麓病院介護医療院で働き始めて、ようやく二カ月が経ちました。昨年、十一月に神奈川県から御殿場市へ引っ越してからの再就職でした。縁あって当施設の面接を受けることになったのですが、初めて入口の扉を開けた時のが忘れられません。笑顔で迎えてもらったこと、他にも廊下で会ったスタッフの方が明るく挨拶してくれたこと、とてもほっこりした気持ちになり不安と緊張が少しだけ和らぎました。私も、この一員になれたらいいなと思ったのが第一印象です。

実際に私もこちらで働かせて

いただけることになったのですが、やはり初めは戸惑ってばかりの毎日でした。これまでは、保育園で幼児の給食業務や大学病院で乳児の調乳業務をしてきたので、当施設とは当然のことながら全く違った感じでした。仕事の内容を覚えることは当然ですが、利用者さんひとりひとりの顔と名前が一致しない、食事内容が分からないといったようなことが不安で仕方ありませんでした。そんな中、他のスタッフさんがひとりひとりの名前を呼び、声をかけている姿を見て、すごいな…と思いつつ、ただ立っているだけの数日間がありました。

食事の介助の忙しい時間に療養棟へ行かせてもらって食事の様子を見せてもらうのですが、その忙しい時間でも、スタッフ

さんたちが介助や食事の準備をしながら、利用者さんの名前を覚えてくれたり、ご飯を作ってくれてる人だよと利用者さんに紹介してくれました。まわりの人達の温かい優しさに本当に感謝しています。時には利用者さんの方から『ご馳走様』と手を合わせてくれたり『美味しかったよ』と声をかけてもらい温かい気持ちにさせてもらいました。そんな毎日の中で一つ驚いたことがありました。当施設に入所する前は点滴で栄養を摂っていた方が食事を食べられるようになって、体を起こすことが出来るようになったという話です。それぞれの違う仕事の方々が、利用者さんのことを考え、少しでも元気に楽しく過ごしていただきたいという一つの目標に向けて協力し、助け合っている結

果だと思いました。私も、その一員になれるよう、頑張りたいと思います。こういった感じで毎日毎日、利用者さんに、スタッフさんに多くのことを教わっています。これからは、私も利用者さんに寄り添った栄養ケアが出来るようになりたいと思います。一人では何も出来ないのですが、他部署の方々から情報をいただけるかと助かります。まだまだ未熟ですがどうぞよろしく願います。



### 結婚

介護職員 苅部 憲永

入職して九年を迎え、自身の周囲がいろいろと変化してきました。

七年目には介護福祉の資格取得を決意。

介護福祉士を目指し実務者研修を受けて、試験に向け勉強していきましたが、努力が足りず落ちてしまいました。

八年目にはリベンジすべく、再度、介護福祉士の試験に向けて勉強し、試験に臨みました。結果は合格でした。

九年目には人生の一大イベントとなる結婚がありました。介護福祉士の試験に合格したことにより、自分の仕事に自信

を持ち始めましたので、何年かお付き合いさせていただいた彼女にプロポーズをしました。

彼女とは以前同じ療養棟で働いていて、仕事を辞めた後にお付き合いをさせていただきまし

た。介護の仕事への理解もあり、協力的な彼女のおかげで介護福祉士としての自分があると思っています。



### 安全対策委員会の

### 取り組み

看護部長 勝又裕子

面会制限が五月二二日に解除されましたが、当施設で開始されてから早いもので四年目を迎えるようとしています。

利用者様をはじめ、ご家族様には大変なご不便・ご迷惑をおかけしております。

施設内でのようなことが起こっているのか見えない中で、今までは違った情報発信をしなければ…と模索しております。

当施設では、安全対策委員会のなかに事故防止対策委員会を設置しており、日々利用者様が安全で穏やかに過ごしていただけるよう、月に1回話し合いを持っています。その取り組みを

知っていたきたく、この場をお借りして発信していければと思っています。

### 【事例】

82歳 女性 誤嚥

### 【挙げた理由】

利用者様の楽しみである食事を安心してお召し上がりいただくために取り組みをし、誤嚥再発防止につなげた事例であるから。

### 【内容】

ホールでの食事中、うめき声があったため、利用者様を見ると苦しそうな様子であった。すぐに吸引をし、呼吸状態は戻った。

【要因分析】

- ・首の力が弱く、顔が上向き加減になった状態で食事を召し上がる癖があった。
- ・食事の召し上がり方が早く、よく噛まないで飲み込んでしまうような様子があった。

【防止策・対策】

- ・見守りながら召し上がっていたり、職員の席を囲み、職員が目の届く範囲で、すぐに手の届くような範囲の席に移動していただいた。
- ・食形態を変更し、なめらかで、噛まなくても飲み込めるような形態へと変更する。

主食



常食（ごはん）



全粥食（カユミキサー）



汁物



常菜（きざみ菜）



みじん菜（ミキサー菜）



主菜



常菜



ミキサー菜



・水分摂取も飲み込む力を考え、トロミのついたお茶を提供することとした。

【その後の経過】

食形態を変更したことで、かけこむ傾向があっても、むせるなどのトラブルはない。また、職員の目が行き届く場所で召し上がっているため、上向き加減の姿勢の時間も減少してきた。



## 『私』

看護職員 山下郁

私は入職時から約六年間、一階療養棟で業務を行っています。入職当時は下の子を保育園に通わせており、入浴介助のある日をメインに短時間のパートをしていましたが、段々と子供の手がかからなくなり、勤務時間を長くし、現在はフルタイムのパートとして勤務しています。

看護師一〜三年目は一般病院の急性期病棟で勤務していたので、毎日忙しく、まともな休憩もとれないまま、必要な業務のみ行い、定時を過ぎてもなかなか帰れず、大した仮眠もないまま深夜勤務をするような日々でした。結婚して子供が生まれて、転居もあったため、他の療養型

の病院で仕事を再開しました。いきなりフルタイムの常勤で勤め始めましたが、今度は家事と育児と仕事の両立が辛くなり、パートになって、仕事をセーブしたり、家を建てたためまたまた転居したり…と、富士山麓病院介護医療院にお世話になるようになりました。

私は県東部が地元で、看護学校もそうだったので、二年生の時の老年看護学実習の時に一週間だけですが、当施設に実習に来たことがあります。その当時は、以前の名称である御殿場高原病院という病院で、なんて山奥にあるんだ…と、とてもびっくりしました。学生皆で朝早くに出発し、自転車・電車・病院スタッフも乗る送迎バスに乗り、実習にきました。現在の旧棟ホールにベッドがあり、窓際に

テーブルが並んでいて、陽の当たる暖かいスペースで利用者様の食事介助をさせていただけました。お茶にとろみをつけるスタッフ、パンをひとくちずつにちぎってスプーンでスूपにぐらせてから利用者様の口に運ぶスタッフ、ツルツルとした花柄のエプロンをつけている利用者様、不思議な形の柄のスプーンを握る利用者様、今までの実習では見かけない光景ばかりでした。



車椅子に乗っている静かな女性利用者様の膝の間にクッションが挟んであり、ベッドに戻った姿を見たら膝が「く」の字に曲がり、寝ているのに体が緊張しているようでした。そこにスタッフが、両脇に薄いクッションをかかえさせ、膝下にクッションを入れ、両膝の間に薄い座布団をたんだものを挟みました。細い手足を下からすくうように行っていました。クッションをはさみ終わると、女性利用者様はふっと力が抜けたようでした。

今までの実習先では、手術を受ける患者様で、自立した高齢者を受け持たせていただくことが多かったと思います。言葉でコミュニケーションがとれる患者様を選んで病院・施設側が当たってくれていたのだらうと



思います。カルテやご本人の話、ご家族から情報収集がしやすいからです。しかし、私はこの実習では、利用者様から声をかけられた、もしくは話しかけて会話が成立したという記憶がほとんどありません。自分が緊張していたこともあるでしょう。しかし言葉によるコミュニケーションをとれる利用者様が少なかったと思います。むしろ、言葉によるコミュニケーションではなく、相手の気持ちを知らう、どんな気持ちでいるのかな？と利用者様をじっくり観察することと、自分が行ったことに対する少しの反応を頼りに、利用者様の気持ちを汲み取ろうと観察することが多かったと思います。通常の実習とは全く違い、白く、暖かく、ふわふわとした印象の一週間でした。

縁あって現在、当施設でお世話になるようになりましたが、新卒の頃に必死に覚えた疾患、検査、治療などは今の自分が仕事をする上で利用者様の健康、安楽な生活を送っていたために十分に役立っていると思います。先輩に怒られながら身につけた看護技術も同様ですが、今、私がここで一番必要なのは利用者様をよく観察することです。見ること・看ることとは看護の基本です。観察して、ご本人が訴えられないところを見つけて、スタッフ全員で共有して、より安楽に、落ちついて生活していただくことです。誰にでも何となく合いそうな援助・配慮ではなく、ただ一人の利用者様に適した援助・配慮が「何」が見つけれられた時、それで利用者様に少しでもいい変

化が起きた時、私は嬉しいのです。そしてとても気持ちいいです。例えば、食事の内容や形態を変え、利用者様の食が進むようになったり、入浴拒否のある利用者様が以前よりもスムーズに浴室に来てくれるようになったりです。いろいろと書きましたが、要は、自分のしたこと誰かが喜んでくれると嬉しいということ。数行で終わってしまいましたがね。ですが、看護師・介護士なら、皆さん何度もお感じになったことがあるのではないのでしょうか。利用者様と自分の歯車がかチツとかみ合った時の充実感は何物にも代えがたいものがあります。この原体験を当施設の実習でさせていただいたと思います。ゆっくりと一人一人の利用者様を見ることができ

施設だと思えます。「ママ」である自分や「妻」である自分ではない、ただの「私」になって看護をすることができる時間を大切に、スタッフと協力して利用者様の生活を支えたいと思います。



ワスレナグサ  
花言葉『わたしを忘れないで』

## 2023年レクリエーション

桜がきれいに咲きました



看護学生さんと語り合い



寿祭で院長先生が挨拶中

三月十七〜十九日にかけて各療養棟で寿祭が行われました。寿祭は当施設の三大行事の一つで、利用者さんによる作品展示や出し物など文化祭のような賑やかさでした。今年は趣向を変えて「このくらの歌」をみんなで歌いながら歌詞を深読みしました。この曲は院長先生作詞、依知川雅子先生作曲の院歌で、言葉を忘れても自分の気持ちを表現できるようにとの院長先生の想いが込められています。

歌詞の中に「父さんと一緒にうれしい日、母さんと一緒にやさしい日」という一節があります。ここで、ご家族からのビデオレターの出番です。「お父さん、元気ですか？」とスクリーン越しに声をかけられた利用者さんはくしゃくしゃの顔で涙を流していました。また小さなお子さんが登場すると、自然とみなさん笑顔になり、和やかなひとときとなりました。

ビデオレターをお寄せくださったご家族の皆様、ありがとうございました！

## 御殿場 あれこれ ⑥

### 野中夫妻をご存じですか

富士山麓病院介護医療院から一キロほど北にある桜公園の東、愛宕神社の域内に「野中到 千代子 顕彰碑」とその由来を記した副碑があります。

野中到（ペンネームは至）は慶応三（一八六七）年福岡に生まれました。気象研究を進めるなかで、より正確な天気予報のためには高層での観測の必要性を痛感し、大学予備門（後の東京大学教養課程）を中退します。明治二八（一八九五年）二月には日帰りで冬の富士山頂初登山に成功、自信を得た彼は続いて山頂剣ヶ峰に自費で木造六坪の観測所を建てました。

九月から食料、燃料などを担ぎ上げ、冬は零下二七、八度にもなる極寒の山頂で二時間おきに気温、風力等を越年観測しようという計画です。

十月一日から観測開始、十二

日には夫の身を案じた妻の千代子が娘を姑に託し剛（強）力の助けを借りて登ってきました。以後、夫婦は高山病と栄養失調に苦しみながら観測を続けますが、体調の悪化は生命の危険にまで及びます。

こうした経過は「有志が慰問のため雪の富士山に登る」（東京朝日 明二八・二二・二七）「慰問隊、要請で野中の病気を隠す」（同紙 一二・一九）などで報じられますが一二月二六日の『時事新報』は「下山を拒む野中夫妻、涙の中に山を下る」を掲載しています。

中央気象台から派遣された技師が「官命」として下山を命じますが、野中は「御命令には候えども、拙者は高層気象観測のために一命を犠牲に供せしもの、一死もとより惜しむ所にあらず」と抵抗します。しかし重ね

ての説得、命令でついに「屈服」、技師や同席の警察官も涙に暮れ「殊に夫人チヨ子はこれを聴くとともにワット泣き伏し」、傍らにいた剛胆と義侠で知られた剛の者も「堪り兼ねてや声を揚げて泣き出せり」。

見てきたような文章ですが記者が現場にいたわけではないでしょう。「美談」は当時から小説になり、劇にもなりました。

野中夫妻の越年観測はかないませんでした。この壮举が中央気象台（現在は気象庁）の「富士山頂観測所」建設につながります。到は滝ヶ原に別荘を建て、ここを拠点に観測を続けるとともに富士登山者のために便宜を図っています。

長く気象庁に勤務した小説家の新田次郎（本名・藤原寛人）は多くの山岳小説を書きましたが、野中到の妻千代子をヒロインとした『芙蓉の人』は繰り返しテレビドラマ化され、八千草薫、藤真利子、松下奈緒などが千代子役を演じています。

アメダスや気象衛星で豊富に

データが集まり、ピンポイントの子報も可能な時代になりましたが、一方で今の深刻な「気候危機」を知ったら野中夫妻はなんと言うでしょうか。

写真は別荘跡に御殿場市の市制五十周年記念（平成一七年）に建てられた「顕彰碑」前で。



右から勝又看護部長、松下常務理事、安田新聞編集委員。看護部長が手にしているのは文春文庫版の『芙蓉の人』です。

せっかくの美女ぞろいがコロナ禍でマスク姿なのは残念。

（内藤 真治）



## 不二山

CACチーム 芹澤 和夫

富士山の麓に建立されてお  
ります富士浅間神社（須走浅  
間神社）には、あるご縁にて  
ご祈祷をしていただいていたから、  
半年に一、二度はお参りに行  
くようになりました。特に信  
心深いわけではないのですが、

家内安全、無病息災、夫婦円  
満を祈願することが多く、そ  
れとは別に苦しい時の神頼み  
をすることもありま。願  
いが叶うように努力はしますが、  
叶った時は一升瓶を持つて奉  
納させていただきま。ま



富士山東口本宮・須走口登山道  
富士浅間神社 茅の輪くぐり

た、参拝後は近くの道の駅  
すばしりに寄り、地場産品  
を見たり買ったたりするのが  
更なる楽しみとなっていま  
す。

境内に入ると、太く大き  
な木々、富士山より湧き出  
た水の流れる小川、その先  
には滝があり、外界とは違  
う空気が感じられ、訪れる  
たびに穏やかな気持ちにな  
ります。

この狛犬は、一對の二  
体ではなく親子三体で、毎  
回珍しく思いながら通り過  
ぎています。神社の鳥居に  
は不二山と書かれており、  
少し調べると、その歴史の  
深さに驚き、大昔に思いを  
馳せることができました。

写真は、茅の輪くぐりが  
設置されていた時のもので  
す。六月終わりから七月初  
めの二週間程度しか設置し  
ていないそうで、運良く輪  
をくぐる事ができ、更にご  
利益が上がったのではない  
でしょうか。

## 編集後記

春先の陽気を「三寒四温」  
と言いますが、とてもそんな  
穏やかな言葉では表しきれな  
い気温の乱高下する春です。  
世界各地で起こっている干ば  
つや大きな山火事、他方で洪  
水のニュースを聞くと、地球  
はどうなってしまったのかと  
心配になります。

一方でWHO（世界保健機  
関）は新型コロナウイルスの緊急事態  
が終了したと宣言しました。  
日本も2類から5類に移行。  
大型連休の観光地はたいへん  
な人出だったようです。長か  
った我慢の期間から一挙に解  
放された気分でしょうか。

でも油断は禁物です。コロ  
ナ発生の起源は不明のまま、  
ウイルスは現在も変異を続け、  
感染力や重症化率がともに高  
い変異株が出現する可能性は  
消えていないそうです。

特に高齢者や基礎疾患を持  
つ人が多い当施設、気をつけ  
て毎日を過ごしましょう。

（内藤 真治）